

使徒の働き11章19-26節 「壁を越えた宣教」

1A 他民族に対する宣教 19-21

2A 慰めの指導者 22-26

本文

今朝は、使徒の働き11章19-26節を見ていきたいと思います。私たちは今、他国における宣教の働き、特に信仰の表現が制限されているようなところでの働きを聞くことができました。私たちと民族も国も異なり、社会の成り立ちも異なる方の証しです。

私たち日本人は、キリスト者は少数派であり、どうして他の国の教会の働きに関心を寄せるべきなのか？と言いますと、それはまさに神の御心だからです。私たちは、他国の兄弟姉妹と交わることによって、より天国の姿に近づいていると言えます。東アジア青年キリスト者大会において、私がいつも開いている御言葉があります。「黙示録 5:9-10 彼らは、新しい歌を歌って言った。「あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」

私たちは、他民族、他国の人々と共に礼拝することに違和感を抱くのであれば、天国に行けはがっかりすることでしょう。天国は、あらゆる部族、あらゆる国語、あらゆる民族、あらゆる国民から、ただキリストの流された血によって贖われた人々が一つになって、この方を賛美しているところです。日本語だけで日本民族だけで礼拝は、実は物足りないのです。他国の人々と礼拝をするところ、言語や文化、国民性、人種、そういった壁を越えたところにあるキリストにある一致が、天における特徴だからです。

だから神は教会を、必ず宣教へと向かわせます。アブラハムに対して神は、「あなたによって、すべての国民が祝福を受ける。」とも約束されました。イエス・キリストにあって、信じる者すべてに救いを与える神の力が、福音です。したがって、言葉が異なるところに、文化が異なるところに、国が異なる所に導かれるのが、私たちに与えられた聖霊なのです。イエス様は言われました。「使徒1:8しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」エルサレムからユダヤとサマリヤへ、そして地の果てにまでという移動があります。これが聖霊の働きです。

1A 他民族に対する宣教 19-21

11:19 さて、ステパノのことから起こった迫害によって散らされた人々は、フェニキヤ、キプロス、アンテオケまでも進んで行ったが、ユダヤ人以外の者にはだれにも、みことばを語らなかった。

11:20 ところが、その中にキプロス人とクレネ人が幾人かいて、アンテオケに来てからはギリシヤ人にも語りかけ、主イエスのことを宣べ伝えた。11:21 そして、主の御手が彼らとともにあったので、大ぜいの人が信じて主に立ち返った。

使徒の働きを先週、デボーションで読んで来られた方は、主が全体で次第に異邦人に対して福音を伝える働きに動いていかれたことを実感できたのではないかと思います。エルサレムのユダヤ人の間で聖霊が下られ、それでエルサレム中をイエスの教えでいっぱいにしたことが書かれています。迫害の手はガマリエルの進言で少し止んだのですが、教会の中にヘブル語を話すユダヤ人と、ギリシヤ語を話すユダヤ人の間で、寡に対する配給のことで対立が起こりました。けれども、使徒たちは知恵を与えられ、七人の執事を任命したのですが、そのほとんどがギリシヤ系のユダヤ人です。ギリシヤ系のユダヤ人は、ギリシヤ時代の時にその王のギリシヤ化に迎合したユダヤ人の末裔で、ヘブル系の正統派的なユダヤ人からは見下げられました。しかし、ここにも文化を越えた神の働きがあります。ユダヤ人の中でも異教の影響を受けていたユダヤ人への働きかけがあったのです。

その執事の一人ステパノが、知恵と御霊によって語ったのでユダヤ人たちを論破しました。それで迫害を受けたのです。彼はサンヘドリンで訴えられ、石打ちの刑に定められました。その時に、エルサレムに激しい迫害が始まったのです。それが 19 節に書かれています、ステパノのことから起こった迫害によって散らされたのです。この時のユダヤ人は、ユダヤ人を越えて宣教の働きをしようとは思っていませんでした。ユダヤ人と異邦人は一切食事をしないという、壁ができていました。しかし、主はすでに、ヨッパにいたペテロに、コルネリオに会うように幻を見せていました。そしてカイサリヤに行き、異邦人の家に入って、食事もして、福音を語ったのです。

神は、エルサレムにおける迫害を用いて、ご自分の計画を実行されようとしていたのです。迫害によって、むしろ福音が広がる機会となり、そしてユダヤ人以外の異邦人に広げる機会となっていたのです。ここで、私たちは知らないといけません。自分たちで作り上げていこうとする教会は、神の御心に適っていない、ということです。自分たちで作り上げるのではなく、神が主権をもって臨まれて、神に服従する者たちの集まる場所で御霊を働かせます。迫害ということは、意図していないことです。できれば、エルサレムで教会が繁栄して、安泰であれば良かったのです。しかし、神はそうはさせませんでした。神はご自分の主権で福音を広げようとされます。

礼拝にいらして、苦しみや圧迫なしで信仰を持たれた方はどれだけいますか？何らかの失敗や悲しみ、心の貧しさや虚しさを通して信仰に導かれたのだと思います。自分で信じようと思って信じたのではなく、信じざるを得ない強い促しがあって信じたのです。そのようにして、私たちは自分たちで何か教会を作るのではなく、力強い御霊の主権の中で自分をへりくだらせ、神に服従することによって教会が生まれます。

そして彼らは、フェニキヤという今のレバノン、キプロスはその沖合にある島、そしてアンテオケはフェニキヤを北に上がった、今はトルコの一帯下にある町です。当時、アンテオケはローマ帝国で第三都市と呼ばれていました。ローマ、エジプトのアレキサンドリアに次ぐ大きさです。商業が発達していて、それから不道徳に満ちていました。偶像礼拝が盛んでした。しかし、そこが当時の教会の中で、最も力ある教会の一つとなりました。私たちは、教会が環境の良いところになければいけないと、考えるでしょうか？ある意味で、私たちのいる所は環境が悪いです。風紀が悪いですね。けれども、アンテオケと同じように交通の要衝とも言えます。電車の路線が何本も入っています。したがって、ここでも神の意外性があります。神は、私たちが環境の良い、清潔で、道徳的な、そうしたところを選んで、なるべく素質のありそうな人を選んで教会を建てられるのではありません。相応しくないようなところで、ご自分の霊を働かせるのです。

そして初めはユダヤ人だけに語りかけていました。ところが、キプロス島とクレネ島の者たちが、ギリシヤ人にも語り始めたのです。壁が崩れました。ちょうどダムが水の量が増して決壊するように、神の御霊はユダヤ人と異邦人の間にあった壁を決壊させたのです。

私たちは、どうしても人間的、合理的だと思ふことを考えてしまいます。「目の前に言葉の通じる、文化も同質の日本人がいる。どうして、他の人たち、遠いところにいる人たちのために祈り、その人たちに福音で届こうとするのか？」と考えるかもしれません。私は日本だけでなく、アメリカでも同じことが言われると、日本にいる宣教師に言われました。しかしなぜ、そうではないのか？答えは簡単です、「主の命令」だからです。したがって、私はカルバリーチャペル・ラスベガスの牧師であった人が、こう言われたのを思い出します。「開拓教会の時から宣教の働きを入れなさい。」教会の予算の中でも優先して、宣教のために使いなさいというアドバイスもありました。たとえ不効率に見えても、このことが神の意図なのです。

そして、このように迫害によって散っていったこと、それからギリシヤ人に主イエスのことを伝えたこと、このことによって何が起こったか？「主の御手が彼らとともにあったので、大ぜいの人が信じて主に立ち返った。」主の御手が共にありました。主が異邦人への宣教を御心としておられたので、その御手がありました。そして大勢が救われました。ここで「信じて、神に立ち返った」とあります。信じただけではありませんでした。本当の信仰は、神に立ち返るといふ悔い改めも含みます。そのよな生活の変化を彼らの中で見るようになります。

2A 慰めの指導者 22-26

11:22 この知らせが、エルサレムにある教会に聞こえたので、彼らはバルナバをアンテオケに派遣した。11:23 彼はそこに到着したとき、神の恵みを見て喜び、みなが心を堅く保って、常に主にとどまっているようにと励ました。11:24 彼はりっぱな人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった。こうして、大ぜいの人が主に導かれた。11:25 バルナバはサウロを捜しにタルソへ行き、11:26 彼に会って、アンテオケに連れて来た。そして、まる一年の間、彼らは教会に集まり、大ぜいの人

たちを教えた。弟子たちは、アンテオケで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった。

教会が宣教に対して関わると、次に必要なのは指導者が建てられることです。主が働いて、救いの御業を行なわれる時、その恵みに留まるように励ます人が必要です。そこでエルサレムの教会は、バルナバを遣わしました。バルナバは、「慰めの子」という意味です。彼は、離れている人を結びあわせる賜物を持っている人でした。迫害者であったサウルを、エルサレムの兄弟たちは恐れしました。けれども、バルナバが彼らにサウルを紹介したのです。兄弟と兄弟をつなげることのできる慰めの賜物を持っていた人です。その彼が今、聖霊と信仰に満たされて、さらに大勢の人を主に導きました。このように、賜物が与えられている指導者が教会は必要です。

そしてバルナバは、さらに人が救われていったので、応援を頼みました。ちなみにバルナバは、キプロス島出身のレビ人だったのですが、同じキプロス系の人たちが多いということだったので、バルナバを選んだのかもしれませんが。いずれにしても、小アジアの南にあるタルソに、パウロはずっと過ごしていました。けれども、バルナバが引っ張り出します。

そして教会にもう一つ必要な活動があります。「教える」ことです。段階を見ましたね、初めは「宣べ伝える」そして、「励ます」、それから、「教える」です。この三つがいつも必要です。それをパウロは一年間かけて行ないました。

いかがでしょうか？初めに、神の主権の中にひれ伏して、神に服従する。次に、自分たちの壁を越えて他の民族に伝えるという働きが、こんなにも主の御手があるのです。そして、さらに指導者が立てられ、教えることもしっかりと行ったら、何が起こったか？「キリスト者と呼ばれるようになった」であります。キリスト者とは、「キリストに似た者」ということです。そこら辺にいる人々が、私たちを見て、「キリストみたいだな」と評価するでしょうか？これがアンテオケの教会の特色でした、そして私たちの教会の特色でありたいです。